vinetur

ドイツの有機ブドウ畑、過去10年で面積がほぼ倍増

ドイツの有機ブドウ畑は2025年に1万5,800ヘクタール、全体の15.5%に拡大。総面積はほぼ横ばいだった。

2026年11月23日（月）



ドイツでは有機ワイン生産が大きく広がり、有機基準に沿って管理されるブドウ畑の割合は過去10年でほぼ倍増した。ドイツワイン協会が11月23日（月）に発表したデータで明らかになった。

同協会によると、2025年に有機栽培で管理されたドイツのブドウ畑は1万5,800ヘクタールで、2015年の約7,600ヘクタールから増加した。これにより、有機ブドウ畑は国内のブドウ栽培面積の15.5％を占めた。この数値は同協会の広報担当者Ernst Büscherが示したもので、農業市場データを提供するAgrarmarkt Informations-Gesellschaftの調査に基づいている。

ドイツ全体のブドウ畑面積がほとんど変わらないなかでも、有機栽培面積は拡大を続けている。同協会によれば、2025年の総面積は約10万2,000ヘクタールで、2000年以降の水準とほぼ同じだった。総面積が概ね安定している一方で、有機栽培の割合は多少の変動を伴いながらも、この期間を通じて着実に上昇した。2000年に有機栽培されていたのはわずか1,700ヘクタールで、国内のブドウ畑面積の1.6％に相当した。2015年にはその割合が7.4％に上昇した。

同協会によると、ドイツの有機ブドウ畑面積は2024年比で2025年に約500ヘクタール増加した。このデータは、有機ワインへの需要が底堅く、栽培者が有機認証基準を満たす生産方法へ移行し続けていることを示している。

この変化を後押ししているのが、高級ワインの生産者だ。ドイツ高級ワイン生産者連盟（VDP）によると、約200の加盟ワイナリーのうち82軒が、VDP加盟ワイナリーのブドウ畑の40％超を有機栽培で管理している。VDPの広報担当者Max Rohdeによれば、こうした事業者や区画の一部は現在も転換期間中で、有機基準に基づく認証をまだ完全には取得していない。

それでも、この分野におけるVDPの存在感は大きい。同連盟によると、加盟ワイナリーが栽培するブドウ畑はドイツ全体の6％弱にとどまる一方、国内の有機ブドウ畑面積の約15％を占めている。このことから、有機栽培は業界全体よりも、多くの高級ワイン生産者の間で速いペースで導入されてきたことがうかがえる。

このデータは、ひと世代の間にドイツのワイン生産の構造が大きく変化したことも示している。2000年以降、有機栽培で管理されるブドウ畑の面積は9倍以上に増えた一方、栽培面積全体はほぼ同じ水準を保っている。つまり、有機ワインの拡大は、国内のブドウ畑全体の拡張ではなく、既存の畑を転換することで主に進んできた。

飲料業界にとって、この変化は小売業者、輸入業者、レストランの仕入れ担当者が調達できるドイツワインの供給構成を徐々に変える可能性がある。有機ワインの生産比率が高まれば、商品ラインアップの拡充や市場での有機商品の訴求強化につながり得る一方、生産者には法令順守、認証、栽培にかかるコストの増加をもたらすこともある。こうした要因は、ワイン業界全体の価格設定、マーケティング、投資判断に影響を及ぼし得る。

ドイツで有機ブドウ畑が拡大するなか、飲料市場の多くの分野では、生産方法やサステナビリティに関する主張、認証ラベルへの消費者の関心が高まっている。ワインでは、こうした関心がワイナリーのブランドの打ち出し方や、流通業者・販売業者の品ぞろえに影響する可能性がある。最新の数値は、有機ワインがニッチなカテゴリーからさらに一歩進み、ドイツのワイン生産に定着した存在になりつつあることを示している。